

近現代日本における父子関係

天沼 香

1.

文化人類学の巨人、マリノフスキー (Malinowski, Bronislaw K.) は、その主著のひとつ、『未開家族の論理と心理』⁽¹⁾の著述を、次のような言葉で始めている。

『お父さんの馬鹿!』。これはわたくしが5才になる一番下の女の子と口論をした際の最後のことばである。わたくしはこの子供に子供が誤っていることを確信させることも、またその考えを訂正させることもできなかった…わたくしは議論することをやめ、反省したのである。わたくしは、もしわたくしがこのように40年も前に自分の父に述べたならば、どんな結果が起ったであろうと想像してみた。わたくしは身震いを感じ嘆息した。…

400年も前には、このような返答をする時は、子はおそらく殴打され、暗室に押し込められ、拷問にかけられ、あるいは死もしくは靈魂の破滅をもって制裁を加えられたにちがいない。四千年前の青銅時代には、おそらく、血に飢えた家長は即座に子を殺戮したのであろう。…更にその四万年前にもなると(…括弧内略)、母系社会の弱い父は、わたくしがなすよりもはるかに寛大に子供らにほほえんだであろう⁽²⁾。

マリノフスキーの機能主義人類学は、その

方法論上、必然的に歴史を極度に軽視していたし、その意味において、他の学派から強く批判されもした。彼自身、「わたくしは時代や仮説をひどく強調するのではない⁽³⁾」とわざわざ述べているほどである。

しかし、ここで述べているように、マリノフスキーは、個人的な体験を、明確に壮大な歴史の流れのなかで受け止めている。慧眼といわざるをえない。

事実、「生物的存在」としての「父」はいざ知らず、「社会的存在」としての「父」は、人類の歴史の進展とともに大きな変貌を遂げてきた。その変貌を正確にトレースしておかなければ、「父性の復権」だの「父親崩壊」だのと叫んでも虚しいばかりであろう。

昨今、家族の崩壊、家庭における父親の存在感の稀薄化等々が大きな問題になっているが、こうした問題を本質的な解決に導くためには、まず家族という存在の過去から現在に至るまでの態様を明らかにする必要がある。それに私なりに取り組んだのが、1997年秋に上梓した『日本史小百科〈近代〉一家族』⁽⁴⁾である。

引き続きは、父親という存在の社会的なありようを、歴史的、構造的に明らかにすることが必要であろう。本稿は、それに向けての序論である。ここでは、まず倒叙的に、近現代日本における「父」「父親」から考えていくこととする。

2.

明治維新以降、第二次世界大戦における敗戦に至るまでの日本社会においては、近代天皇制国家確立のために、国家権力によって、

「家族国家」観が説かれていた。天皇を「父」とし、臣民をその「赤子」とする一種の擬制的親子関係を、本来的に無関係であるはずの天皇と一般庶民との間に導入することによって、国家をあたかもひとつの家族のように、人びとをして認識せしめようとしたのである。

そのことによって、人びとの「忠」の念と「孝」の念を一体化させて、天皇（制国家）に向かわしめることが可能となったといえよう。忠孝の一体化は、天皇（制国家）に対する忠良な臣民を養成するためのイデオロギーだったといっても過言ではないだろう。

忠孝の一体化を、ひとつの重大な基礎として成り立っていた「家族国家」観そのものも、日本型の近代国家を創造していくうえでのイデオロギーだったということができよう。

いうまでもなく、「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」というもの言いをもちだすまでもなく、「忠」と「孝」とは両立し難い場合が少なくない。

親に対する孝行と、主君に対する忠義・忠誠とが矛盾する局面に立たされて悩む武士の姿などは、講談等でもお馴染みである。

そうしたややこしい、人びとの内なる「忠」の念と「孝」の念を巧妙に合体し、人びとの「父」に擬せられた天皇に、その双方を捧げるように人びとをしむけるのに与ったのは、祖先崇拜の念であった。

まず、既に亡くなっている祖先の人びとを、あたかも眼前に生きている家族と同じようにみなし、それを敬い、慈しみ、孝養を尽くすべきことを説く。

そうしたうえで、今度は、その代々の祖先は、代々の天皇に忠節の限りを尽くしてきたことを説く。こうして、天皇への忠節は、結局は、父祖への孝養と合致するものであるこ

とを説く。このような三段論法的手法をもって、国家権力は巧みに、拡大された家族愛というような側面を有する祖先崇拜をも媒介として、日本人を天皇の忠良なる臣民に仕立て上げていったのだった。

それ人間と、生まれては、
まづ孝行の、道をしれ、
おやに不孝の、ともがらは、
鳥けだものにも、おとれりと、
古人はいましめ、おかれたり
…

おいたる人には、よくつかへ、
国のおきては、よくまもり、
もし兵役に、あたりなば、
いさみすゝみて、よくつとめ、
また田畑の、年貢など、
時をたがへず、をさめいれ、
民たる道を、つくすべし、
…

親に孝行する人は、
君につかへて自から、
忠義の名をも、得るぞかし、
孝行はげむ、心こそ、
家のさかえの、もとゐなれ⁽⁵⁾、

明治日本は、このような記載のある教科書を用いて、小学生に儒教的道徳を植え付けていった。同時期（明治20年代半ば）の別の小学生向けの修身の教科書にも、次のような記載がみられる。

凡、子たるものは、父母の恩を思はざるべからず。父母は、その子の生まれいでしより、昼夜、いだき育て、常に、病なくして、すこやかならんことを祈りたまへり。…生涯、子の為に劬勞したまへり。これらの厚恩は、げに、山よりも高く、海よりも深し。されば、子たるものは、よくよく、孝行をつくすべきなり。

…

祖父母は、わが父母の父母なれば、これ

につかふること、すべて、父母につかふるが如くすべし。…(祖父母等に対して)子孫たるものは、よく、心をつけて、よろづのこと、少しも、いとひきらふことなく、何事も、その心にかなふやうにすべし⁽⁶⁾。

こうした教科書の記載に強い影響を及ぼしたのは、元田永孚(1818~91年)の「幼学綱要」である。明治天皇の侍講となり、「教学大旨」(1879年)や「教育勅語」(1890年)の起草に関わり、後には枢密顧問官にまでなった元田が、忠孝仁義を大本とした儒教的道徳を、幼少の者たちに植え付けようとして著したのが、この「幼学綱要」だった。

天地の間。父母無きの人無し。其初め胎を受けて生誕するより。成長の後に至り。其恩愛教養の深き。父母に若く者莫し。能く其恩を思ひ。其身を慎み。其力を竭して。以て之に事へ。其愛敬を尽すは。子たるの道なり。故に孝行を以て。人倫の最大義とす。

…

宇内万国。国体各々異なりと雖も。主宰有らざるの民無し。凡そ人臣たる者。其君を敬し。其国を愛し。其職を勤め。其分を尽し。以て其恩義に報ずるを以て常道とす。況や万世一系の君を戴き。千古不易の臣民たる者に於てをや。故に臣の忠節を子の孝行に並べて。人倫の最大義とす⁽⁷⁾。

このようにして、幼い心のなかに、「忠」と「孝」とを中心的な徳目として、十二分に叩き込んだうえで、その「忠」と「孝」の一体化がはかられていった。このイデオロギー化に重大な役割を果たしたのが、「教育勅語」であった。

朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深原ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ

淵源亦実ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ……常ニ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ一日一緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ独り朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン…

(後略)

明治23年10月30日

御名御璽

この「勅語」の精神を体した教科書には、次のような記載がみられる。

…世界に国は多けれども、我が大日本帝国の如く万世一系の天皇をいただくものは他に存せざるなり。又御代代の天皇は臣民を子の如く愛し給ひ、我等の祖先は皆皇室を尊びて忠君愛国の道をつくせり。…⁽⁸⁾

我等の家は我等が祖先の経営したる所にして、我等の父母は祖先の志を継ぎて家を治むるものなり。されば祖先を崇敬して祭祀の礼を厚くするは極めて大切なる事なり。…我等は常に家を重んじ、祖先に対しては孝順なる子孫となり、子孫に対しては立派なる祖先となるやう努むべきなり。

…

…臣民は君に忠を致し父母に孝を尽すことを念とせざるものなく、数多き臣民皆心を協せて常に忠孝の美風を完うせり。

…

(「教育勅語」は)陛下の示し給へる我等臣民の心得にして、よく之を實行するは独り陛下に対し奉りて、忠良の臣民たるに止らず、又我等の祖先ののこせる美風を発揚することとなるぞとの聖旨なり⁽⁹⁾。

このようにして、「忠」と「孝」の一体化は、教育を通して強力に推し進められていった。その際に、非常にわかり易い具体例としてよく「修身」等の教科書などで引き合いに出さ

れたのが、楠木正成、正行父子の物語であった。

北条氏滅び後醍醐天皇都にかへらせ給ひしが、幾ばくもなくして足利尊氏反きたり。其の後尊氏九州より大軍をひきゐて都に攻上らんとする由聞えしかば、天皇は正成等を遣はして之を兵庫にふせがしめ給ふ。正成この度の戦いは生きてかへり難しと思ひ、途中桜井の駅にて其の子正行に向ひ、「我死すとも汝は我が志をつぎて必ず君に忠義を尽し奉れ。これ汝が我に尽す第一の孝行なり」と懇に諭して河内に返し遣はしたり。此の時正行は11歳なりき⁽¹⁰⁾。

父に諭されて家に帰ったものの、程なく父の戦死の報に接した正行は、自殺しようとするが、母に厳しく戒められる。「これより正行は父の遺言と母の教訓とを守りて、一日も忠義の念を失ふことなく、やうやく成人して、後村上天皇に仕へ奉り、屢々戦功を立てたり。…⁽¹¹⁾」。

時を経て、時に利あらず、高師直の大軍に攻め立てられた楠木正行は、遂に四条畷にて弟正時と差し違えて華々しい最期を遂げた、という物語である。

この父と子の「美談」=「大楠公」の物語は、戦前の小学校や国民学校の学芸会における出しものの定番になっていた。野口武徳は、自分だけの体験ではなく、多くの同年輩の日本人が体験しているはずとして、自らの京城市鐘路公立国民学校での様子を記している⁽¹²⁾。

そこでは、——多分、他校と同様に——、六年生中でもっとも美男子と思われる男子児童が、楠正成に扮し、五年生中でもっとも美少女と思われる女子児童が正行に扮して、「大楠公」が演じられたという。

下級生たちが、それを羨望の眼差で見つめたであろうことは想像に難くない。こうして小国民の間に、忠孝の念が美德として受容されていくことになったのである。と、ともに、

この「大楠公」の物語などを通して、幼い子どもたちは、偉大なる「父」に対する畏敬の念を形成していったであろうことも又、想像に難くない。

「父」は、畏怖すべき存在であり、子たる自分に範を垂れてくれる存在であり、大義に生きる存在である、といった〈立派な父〉のイメージを、子どもたちの心中に形成するのに、大楠公・楠正成はそれこそうってつけの人物だったといえよう。

であるからこそ、この忠義心篤い〈立派な父〉と最善の孝行を尽くす良い息子の物語は、歌にうたわれることにもなった。

青葉茂れる桜井の

里のわたりの夕まぐれ
木の下蔭に駒とめて
世の行く末をつくづくと
忍ぶ鎧の袖の上えに
散るは涙かはた露か

正成涙を打ち払い

我子正行呼び寄せて
父は兵庫に赴かん
彼方の浦にて討死せん
いましはここまで来れども
とくとく帰れ故郷へ

父上いかに宣うも

見捨てまつりてわれ一人
いかで帰らん帰られん
この正行は年こそは
未だ若けれ諸共に
御供仕えん死出の旅

いましをここより帰さんは

わが私の為ならず
己れ討死為さんには
世は尊氏の儘ならん
早く生い立ち大君に
仕えまつれよ国の為

この一刀ひとふりはいにし年
君の賜いし物なるぞ
この世の別れの形見にと
汝いましにこれを贈りてん
行けよ正行故郷へ
老いたる母の待ちまさん

共に見送り見返りて
別れを惜しむ折からに
復たも降り来る五月雨の
空に聞こゆる時鳥ほととぎす
誰れか哀れと聞かざらん
あわれ血に泣くその声を

もともと、この歌は、1899年（明治32）に刊行された『湊川』という歌の本（全15章）のうちの初めの六章（「桜井の訣別」）で、のちに「青葉茂れる桜井の」という最初の部分の歌詞がそのまま題となって広く愛唱された⁽¹³⁾。

この歌の作詞者は、かの落合直文であり、作曲者は、奥山朝恭であった。奥山は、旗本の出で、伊沢修二に見出されて、兵庫や岡山の師範学校・清水谷高女（大阪）等で教鞭を執っていた。兵庫師範に奉職していた時期には、「常に生徒を率いて神戸の湊川神社に参拝していた人であったから、この落合の歌詞を得て大いに喜び、この曲を作ったのちは、常に神前で生徒に歌わせた⁽¹⁴⁾」（1890年〔明治23〕頃）といわれている。

この親しみ易い旋律と哀切に満ちた歌詞とは、いつとなく多くの人びとの口ずさむところとなっていった。芹沢光治良、寿岳文章、野上彰、嘉門安雄等々、幾多の文学者、詩人その他が、愛唱歌としてこれを挙げているところからも、この歌の人気をのほど、普及ぶりが知られよう。芹沢など、その少年時代には、この歌をよく仲良しの友人たちと合唱したとのことである⁽¹⁵⁾。

こうした歌を介して、戦前の少年たちは、忠勇義烈の〈立派な父〉＝大楠公を通じて、アイデアル・タイプとしての父親像を自らの心

中に構築していったことであろう。戦後生まれの私ですら、幼少時に、寝床で、この楠正成・正行父子の話を、父から聞き、軽い興奮を覚え、母が「青葉茂れる桜井の…」と歌うのを聞いて、子どもながらに寂寥感を覚えたことは、昨日の事のように鮮明に記憶に残っている。

もちろん戦後のことでもあり、父母ともに戦前の軍国主義日本への嫌悪感をも語ってくれていたことに鑑ても、そうした物語や歌をもって、私に「忠」と「孝」や〈立派な父〉像を押し付けようとしていたのでは、毛頭ない。

にもかかわらず、私の心のなかには、正成・正行の關係に理想の父子關係をみるような、そうして〈立派な父〉の一典型として、楠正成を考えるような意識が芽生えていったことは否めなかった。

まして、「修身」の教科書はいうにおよばず、歴史や国語の教科書でも「大楠公」を教えられ、さらに先の「桜井の訣別」の歌のみならず、「南朝五忠臣」（作詞者不詳、原曲越天楽今楽）、「四条畷」（大和田建樹作詞、小山作之助作曲）等の歌でも、楠父子の「忠」「孝」「仁」「義」に接した戦前の子どもたちの〈立派な父〉像が、楠正成に、〈理想の子ども〉像が正行に収斂していったであろうことは推して知るべし。

ちなみに、昭和初期の歴史教科書の記述をみておこう。『尋常小學國史』上巻の第23「楠木正成」のなかの一節である。

…尊氏は九州にありて再び勢を取りかへし、やがて大軍をひきゐ、直義と海陸ならび進みて京都に向へり。義貞は之を兵庫に防がんとせしが、賊の勢甚だ盛なりしかば、天皇さらに正成をしておもむき助けしめたまふ。…よりて（正成は）部下の兵をひきゐて京都を發し、櫻井の驛に至りし時、かつて天皇より賜はりし菊水の刀を、かたみとして其の子正行に授け、「此の度の合戦、味方の勝利おぼつかなし、われ戦死の後は、

世はまた足利氏のものとなるべし。されど汝必ずわれに代りて、忠節を全うせよ。これ汝が第一の孝行なり。」とねんごろに諭して河内にかへしやりたり⁽¹⁶⁾。

そうして、自らの意志に反して、負け戦を承知で湊川に布陣した正成は、奮戦むなしく、衆寡敵せず、遂には弟正季と刺しちがえて自害して果てた。「今正成をまつれる神戸の湊川神社は、其の戦死の地にして、境内に徳川光圀の建てたる碑あり、『嗚呼忠臣楠子之墓』とするせり。實に正成は古今忠臣のかゞみにして、わが國民は皆正成の如き眞心を以て御國の爲につくさざるべからず⁽¹⁷⁾」。

同書の第25には、北畠親房とともに楠木正行が登場し、「まことに正行の如きは、勇と仁とをかねたる武士にして、忠孝の道を全うしたるものといふべし⁽¹⁸⁾」と讃えられている。

念のために、改めて確認しておく、こうした記述は、先に引いた「修身」の教科書のものでなく、「歴史」の教科書のものである。その酷似には驚くべきものがある。

歴史の教科書といいながら、この辺りの記述は、必ずしも第一級史料とは言い難い『太平記』の叙述を鵜呑みにしたような記述に終始している。きちんとした史料批判もなされず、最小限なされるべき『梅松論』との比較検討もないままの『太平記』の記載の引き写しでは、「歴史」の名が泣こうというものである。

ためにする『太平記』一辺倒を考えざるをえない。

ともあれ、それらの記述には、皇国史観の醸成とともに、孝子・正行の姿等々を通して、親（特に父親）への畏敬の念や「孝」の念の醸成が目論まれていることが、見え隠れしているのである。

「大東亞戦争」のさなかの「修身」の教科書（『初等科修身 三』）には、「教育ニ關スル勅語」（明治23年10月30日）、「青少年學徒ニ賜ハリタル勅語」（昭和14年5月23日）の二勅語に続いて、一、「大日本」と題して、次のよう

な文言で始まる節が記載されている。

わが大日本は、萬世一系の天皇のお治めになる國であります。御代御代の天皇は、臣民を子のやうにおいつくしみになり、臣民はまた先祖このかた心をあはせて、天皇を大御親と仰ぎたてまつり、忠孝一本の大道をよく守って、生生發展して来ました。

…

御稜威^{みいつ}のもと、世界の人々がみんな一家のやうにしたしみあひ、しあはせに暮すやうにといふのが、わが國の定めであり、めざすところであります。…⁽¹⁹⁾。

忠孝一体化イデオロギーのもと、天皇を「父」に見立て、臣民をその「子」に見立てる手法はここに極まれの感がある。日本国民のみならず、世界人民にまでもその「見立て」を適用しようという大日本帝国の意図が、少年少女に向けて露骨に語られているではないか。

このように、明治維新以降、第二次世界大戦敗戦に至るまでの近代天皇制国家・日本における「家族国家」観の根底を支えた忠孝一体化イデオロギーのもと、擬制的「父親」たる天皇の権威が高められていったとともに、本当の「父親」の権威も又、一般庶民の家庭において高揚していった。

しかも、それは法によって認められた権限に裏打ちされていた。近代的法制とはいえ、明治民法においては、家族各成員の立場はけっして平等ではなかった。戸主一家長が、他家族成員を規制する諸々の権限を有し、優越した立場を保障されていた。そして、多くの場合、この戸主一家長は、一家のなかの「父親」という立場にあるものでもあったのである。

3.

次に少々、日本の童謡を素材にして、母子関係、父子関係をみてみよう。

ぞうさん ぞうさん
お鼻が長いのね
そうよ 母さんも長いのよ

ぞうさん ぞうさん
だれが 好きなの
あのね 母さんが好きなのよ
(まどみちお作詞、団伊玖磨作曲
『ぞうさん』)

お馬の親子はなかよしこよし
いつでも一緒に
ぽっくりぽっくり歩く

お馬の母さんやさしい母さん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり歩く
(林柳波作詞、松島つね作曲 『おうま』)

哺乳類の動物において、何とも「父さん」の影が薄いことを、知ってか知らずしてか、童謡の歌詞にもそのことがちゃんと反映している。事実、たとえば、子象たちと群を成しているのは、雌象たちである。童謡に象の「父さん」が出てこないのは、こうした事実に基いているのかもしれない。

親子関係において、重要な意味合いをもつのは、子育てである。この子育てに関して、重要な役割を果たす親は、多くの高等動物においては、母親である。ライオン等でも、子のためにハンティングに精を出し、餌を捕えてくるのは雌のライオンである。かいがいしく子象のめんどろを見るのは雌の象である。

雌子関係の強さに比して、雄子関係の稀薄さは否めない。子どもとの関係、殊に子育てに関しては雄の雌に対する劣位は明白である。高等動物で、雄が主体的に子育てに参画するのはタマリンなど、ごく少数といわれている。

こうしてみると、人類においても、親子関係で重要なのは、母子関係であり、父子関係の影が薄いのは、高等動物としての人類に

とって必然なのかもしれない。「父親」というのは、童謡への登場回数でみても、母親に大きく遅れをとっている。たまに登場していても、次のような具合である。

やねよりたかい こいのぼり
おおきいまごいは おとうさん
ちいさいひごいは こどもたち
おもしろそうに およいでる
(小出浩平作詞・作曲 『こいのぼり』)

この「おとうさん」など、男の子のお祭である端午の節句のお飾りである「こいのぼり」のま鯉を擬人化して「お父さん」と称しているに過ぎないのである。

このゆび パパ
ふとっちょ パパ
やあ やあ やあ やあ
ワハハハハハハ
おはなしする
(香山美子作詞、湯山昭作曲
『おはなしゆびさん』)

この歌でも、ママやにいさん、ねえさん、あかちゃんとともに、ひとつの指が「パパ」に擬人化されて歌われているだけのことで、父親への親しみ、敬愛の気持等が歌われているものではない。

有名なわらべうた『ずいずいずっころばし』にも、「おとさんがよんでも おかさんがよんでも いきっこなしよ いどのまわりで おちゃわんかいたのだから」などと、ほとんど重要な意味のない脈絡のなかで、「おかさん」との語呂合せのようにして、うたわれているばかり。

ようやく家族のなかで唯一人登場したと思いきや、

グッドバイ グッドバイ
グッドバイ バイ
とうさん おでかけ

てを あげて
でんしゃに のったら
グッドバイ バイ

(佐藤義美作詞、河村光陽作曲
『グッドバイ』)

バイバイされる存在としての登場なのである。しかも、その後には、

グッドバイ グッドバイ
グッドバイ バイ
さんびき うまれた
いぬのこも
よそへ あげたら
グッドバイ バイ

等々の歌詞。その他「ごようが すんだらグッドバイ バイ」「しずんでいったらグッドバイ バイ」。前者の主は「まちからいらしたおばさん」、後者の主は「おひさん」ではあるが、如何ともし難く「落日のお父さん」を歌ってあまりあるような歌詞ではないか。

せっけんさんは いいにおい
おかしのおい おはなのにおい
かあさんの かあさんの におい

せっけんさんは かあさんよ
ぶくぶくあぶく かわいいあぶく
あぶくの あぶくの かあさん

(まどみちお作詞、富永三郎作曲
『せっけんさん』)

このような数多くの童謡にみられるような、母親への親しみに満ち満ちた内容の歌詞に比べると父親に関する歌詞は、あまりに寂しい。

哀れなまでに、童謡の世界において、父親は「でんしゃにのったら グッドバイ バイ」ていどの存在としてしか、歌詞のうえにも登場してこないのである。

やはり、「父親」という存在の、「母親」と

いう存在に比しての圧倒的な影の薄さは、高等動物としての人間の宿命なのかもしれない。

「母さんの歌」を聞いてみよう。

母さんは夜なべをして
手袋編んでくれた
こがらし吹いちゃ
冷たかろうて
せっせと編んだだよ

...

お父は炉端で
わら打ち仕事
お前もがんばれよ

...

そもそものが「母さん」の歌なのだから、止むをえないといえば、止むをえないのかもしれないが、「母さん」に対して「お父」。あんまりといえば、あんまりだが、この辺りに子どもの母親に対する思いと、父親に対する思いとの違いが、鮮明に出ているのかもしれないと、親父たちはホゾを噛むしかないのだろうか。

お母さん
なあに
お母さんていい匂い

(田中ナナ作詞、中田喜直作曲
『おかあさん』)

という歌はあっても、「お父さんていい匂い」などという歌詞は、間違っても作られないだろう。よし作られたにせよ、誰も見向きもしないだろう。この「匂い」は、授乳の間に形成された母親と子どもとの間の至近の距離感を示すものであろうか。母親と至近の距離のうちに自らをおいていることによる子どもの安心感を歌ってあまりあるものといえよう。

対するに、昨今の女子中学生や女子高校生に至っては、父親の匂いが我慢ならない、親父は臭いなどと言いだす始末。が、彼女たち

とて、母親の匂いが嫌だ、とか、臭い、とかはけっしていわない。全くもって、片手落ちもはなはだしい。が、これも親子関係を規定するうえで、決定的な役割を果たすであろう「子育て」への関わりの濃淡に発するものかもしれない。

父の子に対するスキンシップの少なさが、子どもをして「おとうさんて いいにおい」と言わしめない主因かもしれないのだ。幼児期において、その匂いに対する親しみがなければ(あるいは薄ければ)、長ずるにおよんで、そのニオイに嫌悪感を示すことになるのも止むをえないことという見方もできよう。

こうしてみると、未来に向けて、父子の関係性を強化しようとするなら、その方途は明確にみえているといえる。すなわち、そろそろ経済効率優先社会と決別して、「父」たるもの、家庭での時間を重視し、子育てに主体的に参画するなら、自ずから道は開けてくるといえるのである⁽²⁰⁾。

父親が、積極的に育児に取り組むならば、お父さんの「匂い」は乳幼児の臭覚のなかに、心地よい印象とともに刷り込まれ、やがては親しみある匂いとなっていくことだろう。

父親が、主体性をもって育児に参加するならば、「父」と「子」の関係性の稀薄さにはピリオドが打たれ、童謡にもお父さんは頻繁に登場してくることになるだろう。

あるいは、「おかあさんて いいにおい」の二番として、「おとうさんも いいにおい」と歌ってもらえるようになるかもしれないのである。

4.

幼い子どもにとって、ごく日常的なことがらに関して、父親か母親か、どちらが頼りになる存在だろうか。もちろん、どちらと一概に決めつけることはできない。

状況によって、変わることもあろう。が、概して、幼い子どもにとっては、母親のほうが頼りがいがあるようである。あたかも「我

が身を捨ててでも、自分を守ってくれるのは母親」と信じ切っているかのように、幼な子は、母親に身を委ねる。

自らの身に危険が迫ったときに、助けを求める言葉も、「お母さん、助けて」「助けて、お母さーん」であることが多い。父親の方が、至近の距離にいる場合でもなければ、まず、「お父さん、助けて」「助けて、お父さーん」とはいわない。

米国やカナダでも事情は同様である。小さな子どもたちが遊んでいて、わるさをされたり、いけずをされたりしたときに発する言葉。これが、“I’m telling mamma (mama, mom, mummy).”なのだ。このほうが、“I’m telling dad (daddy).”より、ずっと頻度が高い。

子どもの身になってみると、「いいつけ」でも、我がことのように真剣に受け止めて、対処してくれるのは、やはり母親、ということなのだろうか。

それかあらぬか、昨今では、英国や米国でも、「ママ」や「マミー」は相変わらず、幼児の母親に対する呼称として多用されているのに対して、幼児の父親に対する呼称としての「パパ」は、すたれてきている。偉大なる米国の父、パパ・ヘミングウェイの時代も遠く去ってしまった。

親子ほども年の離れたパトロン、愛人、不倫の相手を、年若い女性が「パパ」と呼称するほうが、一般的になってきているほどである。

まだ、英米やカナダでも、同じく幼児の父親に対する呼称としての「ダディー」「ダッド」は健在ではある。とはいえ、「ママ」「mam」「マミー」に対応する「パパ」「パピー」という呼称の衰退は、現実の家族内人間関係における、幼児と父親との相互関係の稀薄化を示すひとつの指標といわざるをえない。

幼児期における子どもの母親との密着した関係、父親との稀薄な関係は、その後の母子関係、父子関係に決定的な影響を及ぼす。そうして、これらの関係性は、子どもの社会化に重大な影響を及ぼすことになる。

「いじめ」や「家庭内暴力」「不登校」「登校拒否」等々の問題行動と、家庭内の親子関係、なにかんづく父子関係との間には深い関連があるのだ。誤解を恐れずにいうならば、健全な父子関係の存するところには、右のような問題行動は少ない。よし問題が生じても、解決の糸口が見出し易いのは当然のことである。

ただ、ここでは、こうした問題に関して詳しく触れる余裕はないので、それは別の機会に譲ることにして、先へ進もう。

乳幼児から少年前期、少年後期へと「子」が育っていくなかで、「父」とのコミュニケーション不足、そしてそれに伴う「子」の内における「父」の存在の稀薄さは様々なところで明らかになる。

私は、毎年、膨大な数の高校生の作文に接している。自らの読書の感想と、実生活上の体験とを絡み合わせた「読書体験記」なるもののコンクールの審査委員という役目のゆえである。

どのようなジャンルの書物に基いて書いてもよいことになっているが、やはり数多く登場してくるのは、純文学作品や高名なノンフィクション作品である。しかし、それらに混じって、昨今では所謂、通俗小説、現場ルポルタージュ、「死」関連の本などから、ともすると「ハウツー」ものの類等々の「お手軽」本まで登場してくる。

それはともかく、長年を通してみて、この夥しい数の高校生の作文のなかに登場してくる「家族」の人びとの数の多さは、——それらの人びとをどのように扱い、どのように評価しているかはさておき——高校生の「家族」という存在に対する願望、期待の大きさを示してあまりあるものといえよう。

ところが一概に「家族」といっても、圧倒的に登場回数が多いのは、「母親」なのである。それを批判的にみているにせよ、最後には、母に対する切ないまでの愛の表出がなされるという類型は非常に多い。

「何で産んだんだ」「クソババア」等々の悪

態をつきながら、本当は「産んでくれてありがとう」と思い、「お母さん大好き」といいたいけれど、口に出してはいえない……といった、やや屈折しながらも、実は「母親」への素直な情愛を示す作文は少なくない。

その他、さまざまなかたちで「母」「母親」は頻繁に登場する。圧倒的に女子高校生の作文が多い（例年、全体の八割前後を占める）せいか、姉妹といった存在も時折、登場する。祖母というのもよく登場し、祖父も出てくる。兄弟なども、垣間みることができる。

けれども、意外にも、というべきか、当然ながら、といわざるをえないのか、自他の「父」「父親」の出番が事の外、少ないのである。そんななかで、まれに登場するのは他者の父親であることが多い。

『この輝かしい日々』（ローラ・インガルス・ワイルダー、講談社）を扱った高校生は、次のようにいう。インガルス家の末娘が、年若くして、不安をいっぱい抱えながら、家族から離れて別の家に住んで、小学校教師として働くことになったときのことである。

父とその家へ向かう途中に、ローラはずっと子供になじめるかを心配していたのです。すると父は「自信を持つ事。まず自分自身を信頼することだ。他人に自分を信頼してもらいたいと思うなら、そうしなさい。」

この言葉に私はジーンとききました。こんな言葉は、心配しているローラにとって一番の勇気となっていたに違いないと思いました⁽²¹⁾。

この高校生は、自らにとっては全くの他者であるローラの父親の、右のような、ちょっとした言動にいたく感動しているのである。その心の深層には、「自らの父親にも、そうした言動をしてもらいたい」というような乙女の願望が潜んでいる、とみることができないのではないだろうか。

現代の父親は、ローラの父親のような然り

気ない言葉を娘にかけるくらいの時間的余裕も、精神的余裕も、自信も喪失してしまっているのかもしれない。だから、娘が、父親に、右のような言葉を言ってもらいたいと痛切に思っているということは、取りも直さず、「お父さん、もっと自分に自信をもって」と言っていることに他ならない。そうして、娘にもどんどん直言して欲しい、忠告して欲しい、示唆を与えて欲しいと切実に願っている。

けれども、いまだに経済効率優先社会のなかに組み込まれて身動きのとれないままに、時間的余裕、精神的余裕を失ない、家庭人としての自分に自信がもてない父親たちは、こんなささやかな娘の要望にも応えることができないのである。

こうして娘たちは、子どもとの関係性において全く頼りにならないその父親を理解不能な異星人のように思い込み、父親たちは、その娘を理解できずに苦悶するという構図が常態化するのだ。

そもそも、家族内人間関係にあって、父親と娘との関係性は、互いに異性であり、異世代であるという二重の異文化性によって規定されている⁽²²⁾。元来、理解し合いにくい同士なのである。

であるからこそ、意思の疎通を欠かないように、互いに理解を深めるために、コミュニケーションを深化させる必要がある。が、先のような次第で、その時間的余裕を作り出すことすらままならない。

娘のほうも、塾に、おけいこに、クラブに、アフター5の遊びにと、年代毎に結構、家の外での諸々に忙しい。こちらも又、家でじっくりと父親と話せるような態勢を整えているとは言い難い。こうして結婚適齢期になると、父娘間のコミュニケーション不全は一層、拡大していった。うっかりすると、それが「結婚しないかもしれない症候群」(谷村志穂の同名書から一人歩きして、1990年代前半の流行語になった)の一大要因にすらなったのである。

経済力を持たずに、夫に抑圧され放題の母

親をみて、娘が結婚生活に幻滅を感じて、そんな結婚ならしないほうがマシと思って、「結婚しないかもしれない症候群」に陥るとするのは、よくあるパターンである。

同症候群に患っている女性に、その理由を尋ねると、やはり、別に結婚しなくても「食べていける」からという理由を挙げる人が多い。つまるところ経済力がある、ということだろう。

男に養ってもらわなくても、独力で生きてゆけるなら、何も結婚して、外での仕事の他に、家事・育児まで押しつけられて苦勞する必要などあるまいという思考の展開は、虐げられてきた側＝女性のものとしては、当然すぎるほど当然なものといえよう。

さて、問題は、そうした女性の思考を助長するものとして、「父親」という存在が見出せることである。次の文章を参照いただきたい。

…世のお父様方は自分がいかに大きな影響を娘に与えているか、お気づきでしょうか。企業戦士といわれ働きバチといわれ、家庭を顧みないでも娘にはやっぱり父親であって、それゆえ父親のあり方は良くも悪くも世間的男性像として心に刻みこまれてしまいます。…

では結婚したがない娘の父親＝男性像はどうなっているのでしょうか。先だって父とけんかしました。原因はささいな、…(父の)「おれが養ってやっているんだ…」という言い方でした。

…この言葉が冗談にも出るような男女関係としての結婚など考えられるわけがありません⁽²³⁾。

この26歳の大学院生の女性は、自らの「父親」という特殊な存在の様態をもって、帰納的に男性一般をみてしまうという誤謬をおかしてはいる。

けれども、この見解そのものは、必ずしも当をえていないとはいえない。むしろ的を射ているといえよう。

年ごろの娘が、自分の父親の言動に日常的に接するなかで、男ってこうなんだという認識をし、そんな男とは結婚なんかしたくないと思うに至るとしたら、実は、男の結婚難に拍車をかけているのは、「父親」という存在そのものということになる。

これは、もしかすると、可愛い娘を別の男にとられたくないという父親の無意識下の意識が、彼をして「男という存在は、本来的に女を抑圧する存在である」「女に対して優越的な立場を誇示したがる存在である」という意味内容を、「養ってやっている」という記号化された言葉をもって、娘に向けて表出せしめている、というようにみることができるかもしれないのであるから。

父親が、こうした高等な手法を用いて娘を「男嫌い」「結婚忌避」に陥らしめているのかどうかはともかく、これまでずっと見てきたように、幼少時から長ずるに至るまでの「子」、わけても娘と父親との関係性の稀薄さ、およびマイナスの関係性は看過しうるほど軽いものではなさそうである。

果たせるかな、娘が結婚して父母の家を離れ、実家に電話をしてくるようになると、次のような父娘間のコミュニケーション不全が発生することになる。

5.

次の20代半ばの主婦Kさんの文章を読んだ方は、それぞれの立場で、「これに似たことは、うちでも…」という感想をもたれるのではないだろうか。

ある晩、実家に電話した。父が出たので「お母さんは？」と尋ねると「今、ふろに入っている」と言うので「じゃあ、また後でかける」といって電話を切った。その後、母の話によると、私の数分前に、ひとり暮らしをしている弟からも電話があって、私と同じ会話を父としたそう。父は「うちの子供たちは父親と話そうとしない」と

怒っていたという。

何を今さら——私はそう思った。

(後略) …⁽²⁴⁾。

Kさんは、後段で、自分の父親は、昔から厳しい、怖い人で、話をしたいとも思わなかったし、たまに自分のほうから話しかけても、そっけないばかりだったのに、「何を今さら」というのだ。

そんな父親だったくせに、家を出て、独立した後の子どもが家に電話をしてきても、自分とは話そうともせず、母親とばかり話すのを怒るのは筋が通らない、そんなのは自業自得じゃないのか、というのが彼女の言わんとするところである。

このKさんの「父と対話のないまま」という投稿は反響を呼び、特に彼女の母親世代、父親世代(5、60代の男女)の人びとから懇切な文章が寄せられている。いくつか拾っておこう。

50代半ばの女性は、Kさんの父親に同情しながら、「電話に出た父親に『お母さんは?』という息子や娘は多いでしょうが、いちがいに父さんと話したくないとは限らず、こまごました話は、お母さんでないと通じない場合が多いからではないかと思えます⁽²⁵⁾」という。それでも(そのように理解できたにしても)、やはり父親は寂しいだろうから、彼女は、「離れ住む息子や嫁いだ娘にはつとめて父親への手紙をすすめて⁽²⁶⁾」いるという。

50代半ばの男性は、やはり自身が、父と手紙のやりとりをしたことを懐しむ文章を寄せている。「父からの便りははがきが多かった。いつも日記をつけていた父なので、書くことはおっくうでなかったらしい。家族の様子、親類、近所の動きなどよく伝えてきてくれた。便りでは文字の誤用、誤記なども指摘してくれた。全く気づいてないことを教えてくれたこともある。大きな恩恵だと思っている⁽²⁷⁾」。

郷里を離れてから十数年間、父親が亡くなるまで夥しい数の手紙のやりとりをしたという40代の女性もいた。「…私より父の方がずっ

と筆まめでした。私の手紙にいつも寸時を置かず返事をくれたものです。…私たちは昔からあまり仲の良くない父娘でしたが、手紙のやりとりでは、不思議とお互いの温かい感情だけが行き交っていたように思います。…父も母親ベッタリの娘たちにさびしい思いを抱いていたのかもしれませんが。面と向かっては話しづらい、そんな父娘の壁を手紙がとり払ってくれていたのです⁽²⁸⁾。

Kさんの投書を受けての、この三人の男女の反応には明確な共通点があった。それは「父」と「子」との間の手紙のやりとりの勧めであり、その実践であった。

私自身の体験に鑑みても、確かにこれは意味のあることと断定できる。実際に面と向き合って話したり、電話で話したりするのが、何となく照れくさいのは「子」のほうばかりではない。「父」のほうも同様なのだ。

その点、手紙だと意外と率直に、素直に父に対して自分の心を開くことができる。父のほうも、そんなふうだった。考えてみれば、高校時代途中から家を離れて下宿をしていた私にとって、父との有意義なコミュニケーションの手段は、まさに手紙だったのである。

ところが昨今は、携帯電話等が不必要なまでに普及し、それを中学生や高校生が持ち歩く、もちろん家を離れた大学生も所持している、そんな時代である。あまつさえ、学生の活字離れは度を増すばかり。

ゆったりとした時の流れのなかで、盃を酌み交わすように、父子が手紙をやりとりするという時代ではなくなってきたのだ。

将来的には、パソコン、Eメールの普及は、「父」と「子」の関係性に新たな1ページを開くことになるかもしれない。が、現在ではまだ、そういうものを扱うのが得意な「子」の世代と、不得手な「父」の世代との世代間ギャップを助長させるものでしかないようである。しかも、やっと修得したそれらの技術は、「父」世代にとっては、仕事上の必需品に過ぎず、「子」どもたちとのコミュニケーショ

ンの手段になどというところまでは、到底、手も回らなければ、頭も回らない。遊び感覚で、それを使うことのできる「子」の世代とのギャップは大きい。

しかも、惜しむらくは、どんなにしても無機質なEメールには、先の三人の男女の考えるような「ぬくもり」を込めることはできないのだ。

肉筆には、肉声と同じような「ぬくもり」を感じることができる。肉筆には、肉声と同様に、その人の人格を感じることができる。Eメールにそれを求めるのは、それこそ木に由って魚を求むるの類であろう。

こうして、ただでさえ関係性が薄くなりがちな「父」と「子」の関係は、その間の救世主的な、有意義かつ有効だったコミュニケーションの手段——肉筆の手紙のやりとり——の衰微によって、益々、疎遠になってゆく。

他方では、携帯電話の普及にともなって、話すことが得意な「母」と「子」との関係は一層、深まっていく。

面と向かったの会話では精彩に欠ける「男」「夫」「父」も、筆を執れば大いに精彩を放っていた。「一筆啓上 火の用心 おせん泣かな 馬肥やせ」など、その際たるものといえよう。もっとも、この手の男は、家に在るときは、「メシ、フロ、ネル」の三語亭主になってしまうのかもしれないけれども。

ともかく、私はここで時代錯誤との批判を恐れず、父親と子どもとの間の意思の疎通を促す手段として、コミュニケーションの欠乏を是正する手段として、肉筆の手紙のやりとりという方法を改めて提唱しておきたい。これは、異世代間の共感的相互理解に、必ずや資するものであると信ずるからである。

6.

『豚の死なない日』（ロバート・N・ベック、金原瑞人訳、白水社）は、「生」と「死」、「父」と「子」をテーマにした物語である。

この作品の文学的評価は、私の任ではない。が、少なくとも、多くの人びとに感性豊かに上の二つのテーマに関して、ゆったりと問いかけているという点においては、出色の作品ではないかと考えている。

米国のバーモント州の片田舎の単調な暮しのなかで、しかし、主人公の少年は、と殺をなりわいとする父の手にかかって死んでゆく豚との触れ合い、その父の死等を通して「生」と「死」を深く学び、「父」と「子」の絆をしっかりと認識していく。

「死」の直前まで「生」を享受していた生物が、自らの意思とはかかわりなく「死」に至らしめられ、その「生」を終える。「死」の瞬間から、単なる「物」と化し、一塊の肉片となる。「生」と「死」の絶望的なまでの断絶。しかし我われ人間は、その「死」せる肉片によって、自らの「生」を享受する。そうした意味における生物社会の「生」と「死」の連続性。

これは、この作品のなかでは、父の「死」と、少年自らの一人前の大人への移行によっても確認されている。主人公の父親も、自らの子どもが一人前になっていくことを眼の当りにして、自らは「死」んでいくけれども、その「生」が子どもによって受け継がれていくことを認識するのである。

死せる父に対して、少年は、「だいじょうぶ。今朝は寝てていいからね。仕事は僕がやるから。休んでていいんだよ」と言っている。

この「父」と「子」の間の、「生」と「死」の連続、いや、もっというなら「父」と「子」そのものの連続には言葉を失わざるをえない。

息子が、自らの「死」を乗り越えて、遅しく「生」を享受していくであろうことを確信するからこそ、「死」を眼前に控えた父は、息子に、「おまえはもう男の子じゃない。一人前の男になるんだ」といったことを言えたのだろう。

そうして、一人前の男として、生きていく息子のなかに、「死」してゆく自らの「生」が

受け継がれてゆくことを、この父親は確信していたに相違ない。その思いは、少年とて同じであったに違いないのだ。

だからこそ、少年は、「父」に、つらい仕事の匂い、死の匂いを感じながらも、その「父」を、「寡黙で 穏やかで 豚を殺すのが仕事だった」とうたうのである。単調な田園生活のなかでの「父」と「子」の見事なまでの一体感がうたわれているではないか。

一体感といっても、これは父離れできない息子と、子離れできない父親の物語などでは毛頭ないことはいうまでもない。互いに父と子としての見事なまでの一体感を醸成しながら、父親は息子に、身近かな存在ではあるけれども、あくまで他者である父親という認識を問わず語りのうちに教えている。息子も、敬愛の念を十二分に抱きながらも、父親という他者の他者性を学んでいく。かといって、それは過度に突き放したような他者化ではなかった。そこには、べったりとした過度な一体感ではなく、さらっとした、しかし深い共感的相互理解に基く一体感が醸し出されていた。

ここでは、「家」という「全体」を通してではなく、純粋な、純然たる「個」を通して、「生」と「死」、「父」と「子」の断絶と、それ以上に連続が語られているのである。

この物語における「父」と「子」の連続性は、確かに「家」が生産の場であり、息子が父親の仕事を日常的に見習い、手伝い、やがてそれを継いでいくことによって保証されている。

こうしたことは、近代以降、多くの場合(少なくとも例外は存在するとはいえ)、「家」という場が生産とは切り離されることが常態となっている現状のなかでは望むべくもないことは認めざるをえない。

よく言われるような「父の背中を見て子が育つ」といった状況は、基本的には、「家」が生産の場であり、子が父の生業を受け継ぐことが当然視されるという前提のなかで、初めて可能だった。

このような前提が、もはや徹底的に崩壊してしまっている昨今では、『豚の死なない日』の父子のような関係性を、現実の「父」と「子」との間に求めるのは、ないものねだりの類に属するかもしれない。

しかし、せめて、彼らのような父子の関係性を、歴史の断絶を超えてひとつのアイディアル・タイプとして、見据えることは、これからの人類における父子関係、家族関係を考えていくうえで、けっして意味のないことではないだろう。

「世界で最も有能な教師によってよりも、理性ある平凡な父親によってこそ、子どもは十全に教育される」というジャン・ジャック・ルソーの指摘（『エミール』）は、それこそ極めて平凡な指摘である。が、しかし、家族の崩壊、父親不在が叫ばれる今日、示唆に豊む助言として、このルソーの言葉を、我われはもう一度、反すうし直してみる必要があるのではないだろうか。

7.

本稿は、私における「家族関係論」のうちの「家庭内人間関係としての父子関係」に関する試論の序論である。ちなみに、前著『日本史小百科〈近代〉——家族——』でも触れたことだが、本来的には学問的論著において私関連の事柄に言及することは禁じ手ではある。これを承知で、敢えて「家族」「父子関係」という身近かな問題に取り組むに際して、そのタブーを破ったことに、ここでも改めて言及しておこう。

今後、各章の内容はより厳しく取捨選択され、精緻化されていくであろう。とともに、これからの課題として、1でも述べたように、倒叙的に近世、中世、古代、原始の各期における父子関係をみていきたいとも考えている。

諸外国における父子関係のありようと日本のそれとの比較考察も、将来の課題である。

〔註〕

- (1) B. K. マリノフスキー『未開家族の論理と心理』（青山道夫・有地亨共訳）、1960年、法律文化社。原本は、Malinowski, B. K., 'Parenthood—the Basis of Social Structure, '1930 and "The Father in Primitive Psychology," 1927.
- (2) 同上。
- (3) 同上。
- (4) 天沼 香『日本史小百科〈近代〉——家族——』、1997年、東京堂出版。原始古代から近現代に至るまでの家族（わけても近現代における制度としての「家」、集団としての「家族」、場としての「家庭」の諸相）に言及した家族をめぐる社会文化史にして、家族思想史というべき著作である。
- (5) 末松謙澄『小学修身訓』巻之中・下、1892年、精華社。
- (6) 東久世通禧『尋常小学校身書』巻之三、1892年、国光社。
- (7) 元田永学『幼学綱要』、1881年、宮内省。
- (8) 文部省『尋常小学修身書』巻五、1910年。
- (9) 同上、巻六、1910年。
- (10) 同上。
- (11) 同上。
- (12) 野口武徳・石川弘義『性』〈ふおるく叢書2〉、1974年、弘文堂。
- (13) 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌(上)、明治篇』、1977年、講談社。
- (14) 同上。遠藤宏・堀内敬三による記述に基く。
- (15) 同上。
- (16) 文部省『尋常小學國史』上巻、1927年、東京書籍。
- (17) 同上。
- (18) 同上。
- (19) 文部省『初等科修身 三』、1943年、東京書籍。
- (20) 経済効率優先の思考に対するアンチ・テーゼとしての「育児」、また「男」「夫」「父」としての人間性陶冶の機会としての「育児」という視点に関して詳しくは、拙著『「男と女」の構図——その共感的相互理解のために——』（1994年、海越出版社）および前掲拙著『日本史小百科〈近代〉——家族——』を参照されたい。
- (21) Y. I. 未刊読書体験記、「この夏 心に残った本」、1997年。
- (22) 男にとっての異文化としての女性、女にとって

の異文化としての男性、まとめて「異文化としての異性」、若者にとっての異文化としての高齢者、高齢者にとっての異文化としての若者、子どもにとっての異文化としての大人、大人にとっての異文化としての子ども等々、まとめて「異文化としての異世代」に関して詳しくは、前掲拙著『日本史小百科〈近代〉——家族——』を参照されたい。

- (23) 匿名・大学院生「結婚しない娘と父親の影響」、『朝日新聞』、1988年5月28日（同紙・テーマ談話室「家族」シリーズへの投稿。後、『家族——日本人の家族観——』上巻〔1988年、朝日ソノラマ〕に所収）。
- (24) 熊谷リエ「父と対話のないまま」、『朝日新聞』、1988年6月23日（括弧内は同上）。ちなみに投書当時の氏は26歳である。
- (25) 田中寿子「父親には手紙を」、同紙同年7月1日（同上）。
- (26) 同上。
- (27) 斎藤貞夫「ぬくもり残る父からの手紙」、同紙同年7月12日（同上）。
- (28) 藤宗洋子、同紙同年月日（同上）。